

船橋市教育委員会 文化課 「四つ葉のクローバープロジェクト」/ 美術フォーラム「ミュージアムを楽しむ 人と地域をつなぐメディア」報告書

船橋市教育委員会では、新型コロナウイルス感染症による1回目の緊急事態宣言下である令和2年5月に、子どもたちが夢や希望を失うことなく社会とつながっていくことを願い、「四つ葉のクローバープロジェクト」を実施しました。文化課では、美術振興施策の一環として、このプロジェクトに協力し、令和2年12月に開催した「美術フォーラム」にて、同プロジェクトを事例にした討論会を行いました。ここでは、「四つ葉のクローバープロジェクト」の実施概要および美術フォーラムの討議の内容、そして令和3年4月に開催した「出張美術展 四つ葉のクローバープロジェクト 豊富中学校作品展@北部公民館」を報告します。

四つ葉のクローバープロジェクト (令和2年5月～7月)



市内小中学校の図工・美術科教諭が中心となって、休校期間中の児童・生徒に対する課題として取り組んだもので、6月には船橋市民ギャラリーで展覧会を開催しました。

1 「四つ葉のクローバープロジェクト」のはじまり

令和2年3月2日から、新型コロナウイルス感染症拡大防止のために小中学校が休校になったことを受けて、市内の図工・美術科の教員が中心になり、休校中の学びのための共通課題を作ることになりました。コロナ禍のなか、不安や孤独を感じているだろう子どもたちに向けて、美術の力で何かできないだろうかと考えて作り出されたのが、幸せを運ぶ四つ葉のクローバーをモチーフとした絵画制作でした。



2 船橋市ホームページ「授業動画」への掲載

プロジェクトのコンセプトや作品制作方法について動画を作成し、市ホームページで「授業動画」として配信しました。これは、学校休校中に、市教育委員会が中心になり、小中学生向けの各教科の学習動画や課題のワークシートなどを配信したもので、図工・美術科では「四つ葉のクローバープロジェクト」のほか、船橋市デジタルミュージアムを活用した鑑賞用ワークシート、工作制作動画などを配信しました。

3 「リアル展覧会@船橋市民ギャラリー」の開催 (令和2年6月15日～7月5日)

6月1日の学校再開後、市内小中学校39校、2,065点の作品が各学校に提出されました。船橋市民ギャラリーでは、これらの作品を実際の展示室に展示する「リアル展覧会」を開催しました。同時に同プロジェクトに賛同する市民の絵も募集して、一緒に展示しました(75点)。3週間の期間に、作品を出品した子どもたちをはじめ、その家族、地域の人々が訪れ、作品を鑑賞しました。

4 鑑賞動画の配信

今回提出された作品の一部を学校毎にまとめて紹介する鑑賞動画を制作しました。これらは市ホームページ「授業動画」で配信し、広く市民の方たちが自宅で作品を鑑賞できるようにしました。

5 鑑賞授業の実施

学校再開後、美術科の授業において、動画を活用した四つ葉のクローバーの鑑賞授業を実施しました。宮本中学校(1年生、6月10日実施ほか)では、市内児童・生徒が制作した作品のうち27点を電子黒板に映して、クラス全員で意見交換をしました(右写真)。

授業の終盤では葛飾北斎の《弘法大師修法図》を鑑賞し、「絵に祈りを込めることの意味」について考えました。作品に込められた様々な想いを、人の意見を聞くことを通して自分の考えを広げ、さらに理解を深めることができた時間になりました。



四つ葉のクローバープロジェクト・コラボ企画 リアル展覧会@船橋市民ギャラリー

会期：令和2年6月15日(月)～7月5日(日)

会場：船橋市民ギャラリー第1ホール、第2展示室、第3展示室

出品数：2,140点 入場者数：474人 主催：公益財団法人船橋市文化・スポーツ公社/船橋市教育委員会



市ホームページ

美術フォーラム「ミュージアムを楽しむ 人と地域をつなぐメディア」(令和2年12月12日 実施)

杉浦 幸子（武蔵野美術大学芸術文化学科教授）、大浜 美樹（船橋市立宮本中学校美術教諭）、山本 雅美（船橋市教育委員会文化課学芸員）

令和2年度所蔵作品展の関連事業の一環として実施した「美術フォーラム」では、ミュージアムにおける生涯学習支援や鑑賞教育に関する専門家である杉浦幸子氏（武蔵野美術大学芸術文化学科教授）を招き、「四つ葉のクローバープロジェクト」と「椿貞雄と清川コレクション展」を事例に、教育と美術の関係、それを実践する地域におけるミュージアム／文化施設の在り方について議論しました*。

【四つ葉のクローバープロジェクトの概要】

（大浜） 新型コロナウイルス感染症拡大により、1回目の緊急事態宣言が発出され、市内の小中学校は3月から5月まで休校になりました。4月に新学期が始まり、5教科の先生たちが課題のプリントを作っているなか、美術科も課題を考える必要が出てきました。5月からはオンラインで授業を行う学校も登場し、私自身、学校の役割はどう変化していくのか考えることになりました。

今、美術科ができることは何だろう。この未曾有の事態を子どもたちは自宅でどのように受け止めているのだろうか。この状況の中で美術の力で出来ることは何かないだろうかということを仲間の先生たちと議論しました。カリキュラムと照らし合わせ、自宅での取り組みやすい課題を考えた結果、「四つ葉のクローバープロジェクト」を立ち上げることになりました。

次に、このプロジェクトはぜひ市内全体を巻き込んで取り組みたい、そこに意味があるのではないかと考え、市教育委員会に協力を求めました。各校で取り組んだ四つ葉のクローバーの作品は学校再開後、各校10点程度の画像として提出され、これらの作品画像を使って鑑賞動画を作りました。最終的に小学校20校、中学校17校の作品からなる11本の動画になり、これらは市ホームページで公開しました。

そして、6月に学校が再開してから、この鑑賞動画を使った作品鑑賞の授業を行いました。授業の目的は鑑賞動画というコンテンツを活用するというもので、他校の児童・生徒の作品を鑑賞し、さらに疫病に関する歴史的な絵画を鑑賞する。この動画を通して、自分と異なる考えや社会を受け入れること、多様な視点を持つことができるのではないかと考えました。統一題材を設定し全校で実施したのは初めてでした。小学生の作品をみて、「うわー、なんかすごい」と思わず言葉が漏れるような、そういうことが起きました。非常に真剣に取り組めました。

また、市民ギャラリーから四つ葉の展示をすることが出来ますよとお話をいただきまして、展覧会が開催できました。もちろん全校が参加したのではないのですが、出品承諾を得た2000点を超える作品を展示しました。外出自粛期間中にコロナウイルスと戦っている子どもたちの表現はとても多様で、表現の幅が広がったなと思いました。みんな四つ葉をモチーフにしているのですが、いろいろな思いが多様な形で表現されています。画材も様々でした。パソコンを使っている生徒もいましたし、ペンや色鉛筆、鉛筆だけの生徒もいました。モノトーンで描いている生徒もいて、自分が表現しやすい画材を選んで描かれたということがわかりました。

来館者の方からも感想をいただきました。「今日、皆さんの作品を見て新たな発見がありました」、「会場に入った途端、みんなのコロナ



美術フォーラムの様子

に対するエネルギーに感動しました」、「気持ちが落ちている今だからこそアートを」など。やはりギャラリーに展示して、実際に作品を見て感じる体験ができたからこそ、発見や感動があった。展示をしなければ、私自身もわからないことだったのかなと感じています。

今回の四つ葉のクローバープロジェクトを通して、自分なりに価値づけたり、自分とは異なる社会に気づいて相対化したりする力を育むなど、重要な視点を学校や地域に示すことができたかなと思っています。また、美術科の授業では、これまで作品主義の美術教育が長く続き、作品制作に重きを置かれた授業が行われてきましたが、これからは日常や社会を意識して、思考するプロセスを発展させることが大事だと感じました。

【展示することの意味 ―清川コレクション展】

（山本） 私は船橋市教育委員会の学芸員として、今回の「令和2年度船橋市所蔵作品展 椿貞雄と清川コレクション」の展覧会の企画をしました。また、四つ葉のクローバープロジェクトにも当初から大浜先生にお誘いいただき参加しまして、市民ギャラリーのリアル展では実際に展示プランなどを考えました。今年は未曾有の1年になりましたが、同じ市民ギャラリーという場所で、四つ葉のクローバープロジェクト展と清川コレクション展という2つの展覧会が実施されたということで、ここでは、この2つの展覧会を通して考えたことをお話ししたいと思います。

船橋市の「清川コレクション」は、地元で医館をしていた清川家が収集した洋画家・椿貞雄の作品を中心とする美術品及び文化財です。展覧会に先立ち調査研究に取り組みましたが、清川コレクションには、千葉や船橋を行きかかった芸術家の作品が含まれており、地域の文化コミュニティの中から必然的にここに残っていることがわかってきました。これらの作品や資料を、ストーリーを作って、展覧会としてギャラリーに展示する。ギャラリー全館を使って過去の地域の文化活動を伝えるというコンセプトで、椿貞雄という船橋にいた画家の、特に船橋での暮らしを感じ取れるような作品たち、清川コレクションに含まれる生活民具、そして清川記念館に由来する資料など約250点を展示しました。100年くらい前に船橋でこんな文化活動が起こっていたことを見る人にわかってもらえるのは、やはり展示をしたからなのだと実感しました。展示したことによって、作品や資料が情報や意味を伝えるモノになっていく。それを見る人が何かを受け止める存在になっていくということが、つくづく感じ取ることが出来た経験でした。

実は、展示することで作品が情報なり意味を伝えるモノになっていくという経験は、市民ギャラリーでの四つ葉の展覧会でも感じたことと同じなのです。2000点を超える数の作品がギャラリーで展示されて、

展覧会というしつらえが出来て初めて、モノが発する思いというものが、非常に強いものとして感じ取ることができました。

船橋市民ギャラリーという地域に根差した文化施設で展示すべきものを考えたときに、例えば、清川コレクションという地域に根差した人々の思いを形にとどめているものを展示するということは、今回の展覧会を通して納得するところがありましたし、さらには四つ葉のクローバープロジェクトも、清川と表裏一体で、清川は過去のこと、四つ葉は現在の姿である。こういうことは、今現在の地域のミュージアムのひとつの姿なのではないかと思いました。今回の美術フォーラムでは、「ミュージアムとは何か」という問題提起から始まりましたが、この清川コレクション展、四つ葉のクローバープロジェクトを通して、「展示することの意味」、そしてそれを「地域の文化施設で行う意味」について、考えを深めることができました。

【人と地域をつなぐメディアとは】

(杉浦) この市民ギャラリーで、全く違うタイプの展覧会が開催されたことがわかりました。四つ葉の展示で「自分の作品が展示されて緊張したけれど、とてもうれしかった」という感想がありましたが、「展示が生み出したもの」ということをお話し伺いたいと思います。

(大浜) うちの学校の生徒の作品も出品しましたが、ギャラリーという特別な空間に生徒の作品が展示される、そして小学生の作品も、中学生の作品も、一般の方の作品も展示されました。私も会場に入ったときに、涙が出そうになったというか、そういった感覚がありました。知人のお子さんが出品して、それを見に来たとき「わーすごい」と言って、「わたし何かすごい」と、自分の作品をじっと見ていました。小学校1年生の子が、あれも面白いといって、他の子の作品もすごく近くで見てくれる姿を見て、本当にやってよかったなと思いました。

(杉浦) 学校でも体育館や教室で作品を展示していますね。そういうものと、ここギャラリーの展示室、パブリックな場所、公的な場所で自分の作品が他の人の作品と一緒に展示されているというときの驚きとか、喜びは大きいのかなと思ったのですが、その辺どうですか？

(大浜) そうですね。やはり、特別な場所には特別な作品しか飾られないという意識はやはり生徒たちのなかにはあります。特に中学生ぐらいになると、自分は作品展には選ばれたことがないし、絵は得意ではないし、うまくないから、遠い存在であるという生徒はやはり多いと思います。今回は出品承諾がある作品をすべて展示しました。その中には、線だけの簡単に書いたような絵でも、出品承諾されたものもありました。しかし、よく見ると、そこには自分の思いがきちんと描いてあるのです。彼は自分なりの表現方法で描いた。そして、これを展示すると意思を示した。そういうところに、今まで教員は目が向かなかったのです。今回を通して、静かに思いを抱いている生徒の作品にも目を向けられるようになりました。

(杉浦) 船橋の子どもたちが市民ギャラリーで展示することに意味があります。子どもたちは地域の様々な場所で育まれると思いますが、そのひとつにギャラリーもあります。もちろん特別な芸術作品がここに来るのも問題ないのですが、それだけじゃなくて、船橋の市民や子どもたちの作品がきちんと展示されることで、「市民の誇り／Civic pride」を育てていく役目をギャラリーが果たせるのではないかと思います。これからは、市民の人たちが自分たちの街に市民ギャラリー

があるということが誇りであると思ってもらえるような場所に代わっていくのだと思います。

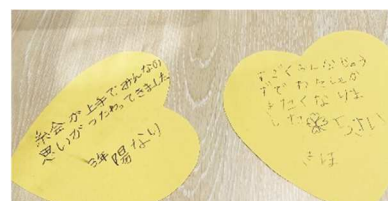
同様に、今回の清川コレクション展ですが、時としてコレクションは自治体の重荷になることがあります。しかし、この展覧会では、椿さんの作品だけではなくて、椿さんに関わる方やそれ以外の方とか、清川さんが船橋の方として集められて、市に寄贈されたというストーリーが、その土地の「市民の誇り／Civic pride」の醸成につながると思います。これは地域にとってミュージアムが果たすべき機能であるのではないかと思います。

(山本) 今回、作品の力を発揮できる展示の在り方というものを実感しました。やはり展覧会をする展示室がないということは、せっかく保管しているものも、その意味や価値が伝わらないのだなということを実感しています。これからは、地域にゆかりのある人の記憶や今生きている人たちの考えを取りこむような、そういうことを作品や資料を通して感じ取れるような展覧会を企画していくというのが、今回の四つ葉のクローバープロジェクトと清川コレクション展を経験して出た結論です。

(杉浦) 今日お話をきて、これから市民ギャラリーで目指していくのは、船橋市が持っている地域の歴史や文化に根差したコレクションというものをしっかりと調査研究して展示していくこと、市民の皆さまが生み出した表現を見せていくこと、そして、市民のなかでもこれからの未来を作る未就学児を含めて児童・生徒たちの表現を見せていくという3つの柱を作っていくことなのではないかと思います。そしてトークや制作体験も出来るといいと思います。さらに広報が重要になっていくので、SNSを使ってもいいのですが、人が人にちゃんと伝えることが、地域なら出来るのではないかなと思うのです。そういうことをきちんとやっている市民ギャラリーが「市民の誇り／Civic pride」のよりどころになると思うのです。



展覧会の様子



展覧会の感想



*美術フォーラム：地域における美術活動とコミュニティの在り方について考えるために、毎年12月の所蔵作品展の関連イベントとして開催しており、今回で3回目になる。過去には美術鑑賞教育(2018年)やアート思考(2019年)をテーマにした。

出張美術展「四つ葉のクローバープロジェクト 豊富中学校作品展@北部公民館」



豊富中学校では、令和3年1月8日から始まった2回目の緊急事態宣言中に、「四つ葉のクローバープロジェクト」の一環として、コロナ禍において生徒たちが日常や社会に対して感じている思いを、四つ葉をモチーフとしてA4サイズの画用紙に表現する授業を1、2年生対象に行いました。授業では、昨春のプロジェクトで制作された船橋市内の小中学生の絵の作品動画を鑑賞し制作しました。できあがった作品を近隣の北部公民館ロビーで展示することで、生徒やその保護者の方、地域の人々に子どもたちの思いを感じてもらう機会になりました。

授業を受けた生徒の感想

「四つ葉のクローバープロジェクトはたくさんの人へ感謝などを伝えられると思った。」

「医療従事者の方や、感染してしまった人、感染を防ぐために、自分達の年齢でできることを作ってくれたのはとても良いことだと思った。」

「一つひとつの絵に違う思いが込められていてすごいと思った。クローバーがあるだけで、絵が優しく感じた。」

「私たちの学校は行けているけれど、学校にまだいけない生徒のみんなや病院で毎日働いてくださっている方、家族に応援のメッセージを伝えたいです。」

「外出自粛や学校の休校、ソーシャルディスタンスを保つこと、県外への移動の制限、マスクの着用など、今はいろいろな制限をかけられ、「自由」に過ごすことができない。だから「自由」をメインにしたメッセージ（絵）を描いてみたい。」

「今の状況を暗い夜中で、もとの生活に戻る時を夜明けとして考えて描きたい。ふつうに友達と遊んで、買い物に行ったりしたい。」



授業の様子

見学会の様子

授業を担当した豊富中学校の 竹原裕子教諭(美術科)のインタビュー

生徒たちは、テーマがはっきり決まっていたので、取り組みやすかったと思います。制作動画とコンセプト動画、あと、中学校、小学校の鑑賞動画を2本見ました。目からの刺激は大きいと思いました。「こういうのを描くんだ」というのが、よく伝わったと思います。そして、四つ葉のクローバーというモチーフが入るのが描きやすさにつながったと思います。

生徒は、船橋市内の小学校や中学校の生徒が描いた作品動画を興味深く見ました。同世代の子どもがどんなものを描いているのかは気になったと思います。しっかり描けている作品については、「すごいね」という声が聞こえました。良い刺激でした。

作品を制作する段階では、「四つ葉のクローバー」に気持ちを乗せて描くというのがやりやすかったと思います。四つ葉のクローバーを入れることでメッセージ性が出てくる、まとまるという気がすごかったです。描きやすかったし、レイアウトもしやすかった。考えやすかった感じがします。

作品を描くことは楽しくできていたと思います。授業の中では作品を発表しあう時間はなかったので、展示した後にみんなで話し合いたいと思います。公民館で見ると、また作品の見方も変わってくると思います。

出張美術展「四つ葉のクローバープロジェクト 豊富中学校作品展@北部公民館」

会期：令和3年4月1日（木）～5月2日（日）

会場：北部公民館ロビー

出品数：59点

見学会：4月16日（金）実施

発行：船橋市教育委員会文化課 令和3年10月

住所：〒273-8501 船橋市湊町2丁目10番25号

TEL: 047-436-2894 E-mail: bunka@city.funabashi.lg.jp

企画・編集：山本雅美・益子実華（令和2年度文化課学芸員）

